



生活綴方・障がい児教育の先駆け

# 近藤益雄が求め続けた教育の真実

— 今、その実践と思想に学ぶ —

講師 **清水 寛さん** (埼玉大学名誉教授・  
全国障害者問題研究会顧問)

とき 2011年4月2日(土)  
13:30~16:00  
ところ フォレスト仙台 2F 会議室  
参加費 500円 (※ 手話通訳あり)



【泣く子をあやす近藤益雄】

1958年、近藤益雄のもとをひとりの学生が訪ねてきた。近藤は、学生の悩みに耳をかたむけ、丁寧にアドバイスをした。それから4年経ち、近藤はその青年に手紙を送る。

「お会いしてから、もう四年以上にもなりますか。早いものですね。垣一ぱいの朝顔を山羊がさかんにたべていたのを思い出して頂けますか。あそこは今は拡張して教室になっています。又お出かけくださいませんか。ほんとにお会いしたくてなりません。」

しかし、二人が再会することはなかった。文字どおりの一期一会が、青年 清水寛の歩む道と、ライフワークとしての近藤益雄研究を決意させた。

講師の清水さんの心のなかに生き、今も魅了してやまない近藤益雄。その人間として、また教師・教育者としての魅力と、近藤益雄が追い求めたものを思う存分語っていただきます。

風のなかに  
一本のマッチの  
火をまもる  
がごとく

## 【近藤益雄について】

1907年、長崎は佐世保に生まれる。幼くして父を亡くし、母とふたり平戸で暮らし、國學院大學高等師範部へ。

1927年、長崎に帰り小学校教師となる。子どもたちの日々の生活に寄り添いながら、生活綴方教育を実践。その実践は、全国の綴方教師からも注目される。長崎の原爆投下では、長男耿(あきら)を失う。

敗戦後、復職し、中学教頭・小学校長をするも50年、障害児学級を開設・その担任になる。53年には、生活施設「のぎく寮」を開設し、障がい児を指導。62年、小学校を退職。公的助成や保障もない中、障がい者・障がい児の教育と福祉に私財を投じて尽力。1964年、心労が重なり死去。57歳。